

戦前の話である。慶応大理工学部の前身、藤原工業大の工学部長だった谷村豊太郎が実業家から「すぐに役に立つ人間をつくってもらいたい」と注文された。

これに対し谷村は「すぐに役に立つ人間はすぐに役に立たなくなる人間だ」と返したという。慶応大の塾長を務めた小泉信三が自著『読書論』に書き留めている▼「結果を急ぎ、すぐに評価しない。性急に役に立つことを求めない社会が必要です」。昨年のノーベル医学生理学賞を受賞した大隅良典・東京工業大荣誉教授も、一昨日開かれた崇城大開学50周年記念式典での講演でそう強調していた▼ノーベル賞の受賞理由となった生物の細胞が自分自身のタンパク質を分解して再利用する「オートファジー（自食作用）」の研究は、今ではがんやアルツハイマー病の治療など、幅広い応用が期待されている。しかし、大隅さんが手掛けた当初は、それほど注目を浴びる存在ではなかったという▼講演では、地道な基礎研究の積み重ねによって徐々に成果を上げてきた経緯を紹介し、「知的好奇心に支えられた長く細い道のりだった」と振り返っていた▼講演の前日にはノーベル賞の賞金などから基金を拠出する自身の財団設立を発表した。長期的な視点で若手の基礎研究を支えていくのが目的だ▼「私の研究が本当に役立つのは100年後かもしれない」と語っていた大隅さんである。「すぐに役に立つ」ことを求める社会の中で、「長く細い道のり」を身をもって知る人ならではの人材育成だろう。